

中村幸彦著述集

第十一卷

©一九八二

中村幸彦著述集 第十一卷

定価六五〇〇円

昭和五十七年十月一日印刷

昭和五十七年十月十日発行

著者 中村幸彦

発行者 高梨茂

印刷者 青木勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三―四
検印廃止

中村幸彦著述集

第十一卷

漢學者記事

目次

一	伊藤仁斎の思想	九
二	伊藤仁斎日記抄	五
三	名物六帖の成立と刊行	七
四	操觚字訣の成立	一〇七
五	古義堂の蔵板に関する文書について	一四一
六	古義堂雜記	一八三
	1 古義堂略史 (一八三)	
	2 孟子古義の成立 (一九〇)	
	3 古義學雜感 (一九六)	
	4 伊藤東涯の古今學變について (二〇〇)	
	5 迂愚―堀川學派の教訓 (二〇六)	
七	伊藤東涯來簡集抄 ―付 初度含翠堂行、入撰誌―	二〇九
八	老莊思想の實踐者 金蘭斎	二二三
九	穂積以貫逸事 ―付 穂積以貫年譜略―	二四六
十	宮崎筠圃と古義堂	二八五

十一 黒川道祐伝補遺 二九八

十二 雨森芳洲とその交友 三〇六

十三 都賀庭鐘伝攷 三三三

十四 都賀庭鐘の中国趣味 三三八

十五 文人片影 三五七

1 護國と文人趣味 (三七七)

2 蓮池竜津寺―堯素翁と大潮 (三六二)

3 篠崎三島の一資料―『二南唱和集』 (三六四)

4 独立の臨池述意 (三六七)

○

十六 近世文人意識の成立 三七五

十七 近世後期儒学界の動向 四〇八

後記 四三一

書誌 四三四

〈挿画〉

伊藤仁斎肖像 二 異字同訓考 二四 孟子古義 一九四

仁斎先生真蹟 三 操觚字訣 二四 伊藤東涯肖像 二〇二

日次之覚帳 六 古義堂藏板に関する記録 彭城雲鼎書翰符箋 二三〇

名物六帖 六 二六、二四七 金蘭齋像 三三七

滑稽雌黃の穂積以貫序	二四
宮崎筠圃筆竹の画	二六
過目抄	三五
伊藤梅宇書狀	三五
開卷一笑	三三
全唐名譜都賀庭鐘印	二四七
二南唱和集	三六
臨池述意	三〇

漢學者記事

一 伊藤仁斎の思想

ただ今のご紹介にもございましたように、あるいはまた、本日お集りの皆さまのなかでなにがしか私に関する知識をおもちの方がございましたら、『近世思想の行方』というこの講座に、私が罷り出ますことはちょっと場所がちがっているのではないかと、とお思いの方もあらうかと存じます。私が専攻いたしておりますのは、近世小説、しかもたいへん行儀の悪い浮世草子とか洒落本だとか黄表紙だとか人情本だとかいうような、まず申せばたわいない作品ばかりを扱っております。

今度のこの講座に私のほかにお話下さる先生方、尾藤、加藤、古田、阿部、柴田、安永諸先生方のなかに、変なのが一人混っているな、とお思いではないかと思えます。申すまでもなく私は思想史家ではございません。それではなぜ、そういう場違いのところへ罷り出たかと申しますと、私は今ご紹介がありましたように、天理図書館の図書館員でございました時に、仁斎以来五代といいますが、六代といいますが、ずっと明治まで続いておりました古義堂といわれる伊藤家の旧蔵書が、全部天理図書館に入りました時——その文庫を天理図書館では古義堂文庫と呼んでおりますが、その古義堂の遺書の整理をいたしました。

私の先輩に哲学者が一人おります。その哲学者が過ぎりました戦争の間に、カントの『純粋理性批判』をドイツ語をもって全部手写いたしましたして「私はカントと同じだけ書いた」といって我々を笑わせたものですが、私は仁斎自身の原稿はもちろん、仁斎の著述に關します、東涯、東所等代々続いた古義堂の先生方の書いたものは全部繙くだけは繙きました。そういうことで本日招ばれたのではないかと思うのであります。従って、その繙く間に少しは中身を観ないと整理もできませんので、それを観ている間にすっかり仁斎の仕事に、あるいは仁斎の人に魅せられました一種のファンなのです。従って体系的に、無論思想史学的に仁斎の書物を読んだわけではございません。

仁斎という人は大変恐い人でありまして、朱子を擱えましても、「朱子は孟子が読めておらない」という人です。今、私がここで仁斎の話をしておりますことを泉下の仁斎がもし知ったといたしましたら「お前は俺の書物をろくろく読んでおらないで何で俺の話をするか」と仁斎に叱られるのではないかと、実は忸怩といたしまして、この席に出ますことを何回もお断りしたのですけれども、いや、ともかく出てこいということで、仕方なく罷り出たのであります。従って、これから申しますことは、研究家としての意見ではありませんで、一個のファンの仁斎観であるということでご容赦をいただきますのであります。これから何回か続きまして、それぞれ専門の先生からいろいろと難しいお話を聞かれるわけでありますので、一番初めは、まずは近世思想史の入門というようなことで、ファンの話もひとつ聞いてやろうというようなお気持で私の話を聞いていただきますと大変ありがたいと存じます。

仁斎のことは、最近、特に戦後、頓に注目されまして、いろいろの研究家研究書が出ております。岩波文庫で『童子問』という仁斎の主著をたいへん読み易い形で出版されていることは皆さんご存知でしょう。あるいは同



伊藤仁斎肖像

じ書店から出ました「日本思想大系」のなかに『仁斎、東涯』篇というのが一冊ございまして、そこにも『童子問』を除いた仁斎の主な文章、主な書物が収められております。従って、ここで仁斎の略伝をお話することはやめることにいたします。その「思想大系」なり、あるいは『童子問』なりの解説を、お読みいただきましたらたいへんありがたいと思います。もし今日の私の話が少しでも皆さまのお耳にとまりましたならば、ぜひ解説だけではなくて、『童子問』なり『語孟字義』なりという仁斎の主著を皆さまにお読み下さい、ということをご最後にお申すつもりでございましたが、一番初めに申しあげることになります。

あまり固いことから申しますのもいかがかと思えますので、大変呑気な話から入ってまいります。

皆さんは、お齡の方は中学校、若い方は中学校なのか高等学校なのか知りませんが、英語を習いました時に、英文和訳とともに和文英訳という科目があったと思います。私の時はたいへん困ったのですが、あるいは私と同じように、和文英訳などというものはたいへん面倒くさいものであるとお困りになった経験をおもちの方が多いのではないかと思います。こんな時、一体誰がこんな迷惑なことを始めたのだろうと考えるのは、私の子供の頃からの癖であります。なかなかわかりませんでした。明治の、誰か英文学を講義したり、英文学を輸入したり、英語学を教えた方々が考えたんだくらいに思っておりましたのですが、やがてそれを始めた者が、誰であろう伊藤仁斎である、ということがわかってまいり

ました。無論、伊藤仁斎は英語ができたわけではございませんので、伊藤仁斎の場合は漢文和訳、和文漢訳ということになります。

漢文を稽古するのに漢文を日本文に訳すことは、それは大昔から、漢文が日本に輸入された時からあっただろうと思います。日本の文章を漢文に訳すこともまったくなかったわけではないだろうと思います。『日本書紀』は漢文で書かれていますので、おそらく日本人が、あるいは日本人でないかもしれませんが、日本人もその中に参加しているといえましたら、これは和文漢訳であることになるわけですが、今日の学校に於けるような方法で外国文を練習することを始めたのは、どうやら伊藤仁斎が最初のようにあります。彼の生涯の履歴を書きました一子東涯の文章の中に、「自分の亡くなったお父さんは訳文会というものを始めた。それは漢文を国字に直す（これが漢文和訳であります）、そして国字になったものをもういっぺん元に直して漢文にする（これを復文といいます）、要するに訳文と復文とを学生に課して、復文の場合、字数が元の文章とどれ程ちがっているか、あるいは（ご存知のように漢文の場合は日本語とちがいで、動詞が上にまいりますので）、文字の上下がちがっていないか、というようなことを調べた上で、漢文の文法（と申ししましても今日の文法ではございません。今日にあてはめましますと文体というようなものだろうと思いますが）、文体を覚えさす方法を採用した。従って若い学生達は、これによって多くの利益を得ることができた」と、こう書いております。

面白いのですが、その時の原稿も古義堂文庫には残っています。あるいは原稿の今はないものも、かつて原稿があったものは、これを写しまして『訳林』という名前で東所という孫にあたる先生が残してくれてありますので、どういうふうにして訳文なり、復文をしたのかがわかるのであります。

仁斎の塾というのは当時の学校、塾から考えますと他の塾と若干ちがっていたのではないかと思うのです。復

文、訳文を行う時には先生も学生と一緒にするのです。先生がまちがっている場合は、やはり先生も何点か減点されるわけなのです。それで復文なり訳文なりしたものを交換しまして、別の人がそれを採点するというようなことをいたしたのであります。

仁斎の塾という変ないい方を申しましたが、後にこの伊藤家の塾のことを古義堂と呼びます。古義堂というのは、仁斎の時に果してこの名前を用いていたかどうか、私はまだその証拠を存じません。仁斎の一子東涯の時にありますと、東涯自身が古義書院という名前を用いておりますし、今日では残っておりませんが、古義堂の講義の場所に掛けた古義堂と称する額があったことは記録が残っております。しかし仁斎の時に果して古義堂と称したかどうかはわかりませんけれども、いちいち仁斎の塾などというのはおかしいですから、古義堂ということにしておきます。その古義堂というのは当時の日本における儒学の塾に見ますように、先生が講義をしまして弟子が鞠躬如としてそれを聞く、こういうたぐいのものではなかったようであります。

仁斎の頃と同じ時分に一番流行^{はや}ったのは山崎闇斎及びその門下の塾であります。これは「崎門学派^{きもんがく}」と呼んでおりますが、この崎門学の塾では、講義がすべてでありまして、闇斎先生こそ、いくつかの本を出版しましたが、それから以後の人はほとんど著述の刊行をしないのです。講義を弟子が筆記いたしまして、そのノートを先生に提出するのです。それでどれだけよく聞いているか、どれだけ聞きもらしているかで、先生は学生の優劣を決めたわけです。今日の大学では、ノートで採点をする方法がありますが、ノートで採点をする方法を初めて採用したのは山崎闇斎学派であります。これは仁斎の訳文とはちがいがいまして、楽であるせいでしょいか、今日の大学生は、ノートの採点を喜びます。仁斎はたいへん迷惑がられて、闇斎はたいへん喜ばれているという変な現象が、今日学校に残っているのであります。ですから闇斎らが講義をする時には、塾生たちはまことに血眼で、決死の

眊をして先生の講義を聞いたのでありますが、一方、古義堂では皆寄り集って、先生も学生も討議検討するという風でありますから、ちょうど今日の大学で申しますと、師弟、友達が集りまして読書会を開くとか、あるいは輪講をすることかいうような形で学問をするのが古義堂風であります。仁斎自身も「私は門人や歳の若い者のいうことでもなおざりに聞くことはない。いやしくも取るべき説が出た場合は、皆が寄って相談をした上で、これよろしいというように集議で決めてそれを結論とする」といっております。彼は三十六歳、寛文二年に自分の塾に同志会という会を開きました。というよりは、同志会そのものが仁斎の塾における最も中心的な営みであったわけですが、同志会を開きました時の、こういう文章があります。「自分が熟々考えるのに、人間には不幸なことが三つある。但し、この不幸というのは、貧乏であるとか、自分が困難な生活状態にあるとか（貧賤患難は与らず）、というようなことは不幸の中には入らない。その一つは、学を知らざること（自らが従っている学問の本質を知らないのは、これはいへん不幸である）。その次には、学んで賢師友に会わざること（賢い先生や賢い友人に出会わないこと）。三番目は、せっかく賢師友に出会ったけれども、その要領すなわち学問の要領を体得できないというの、これは不幸である。人生これより大きな不幸は無い。」

今日の学生に聞かせてやりたいと思ひまして、私はたびたびこれをいうのですが、彼等は恬としてこれを不幸とは思わないような観がありますので、私の不徳のいたすところですが、たいへん困っている次第であります。そういうように相寄って研究するのが古義堂の一つの学風でありました。訳文会、復文会も実はその一つの方法であったのです。一体仁斎はいつ頃からこういうものを始めたのか、ですが、実際に残っておりますものに年号を書いたものがありまして、それらには延宝とか貞享とか書いてあります。元禄を溯ること十年ないしは五年頃のものが多し。但し年号を書いてないものも相当あります。むしろ年号を書いてないものの中に古いものがある